

発行元：公益財団法人山口県ひとづくり財団
県民学習部
〒754-0893 山口市秋穂二島1062
TEL 083-987-1710 FAX 083-987-1760
E-mail yh-kengaku@hito21.jp
URL <https://yamaguchi-learning.com/>

第2回支援員研修会 講師 寄稿

日時 令和7年11月24日（月祝） 12:55～15:30
場所 講義：美祢市秋芳地域まちづくりセンター（美祢市秋芳町秋吉5357）
視察：美祢市秋吉台

—秋吉台の自然に親しむ会の草原保全活動— 秋吉台の自然に親しむ会 事務局長 松井茂生さん

【山焼き中止の現状】

秋吉台の草原は山焼きを行うことにより保たれています。秋吉台草原の周囲から一斉に火入れを行うようになったのは大正14年からで、私も58年前から山焼きに携わっていますが、今年のように山焼きが行われなかったのは初めてのことです。

山焼きが中止になった草原は草丈が高くなり、クズやハギが異常に伸びて目立つ存在になっている一方で、他の野草の存在は乏しくなっています。また、センブリやムラサキセンブリの根生葉などはササの葉一枚かぶさるだけで光合成をしませんので、これら小さな野草たちの減少を危惧しているところです。

【草原の保全活動】

近年、ウォーキングやジオツアーなどのアクティビティで草原の利用者が増えて、既存の整備されている遊歩道以外の遊歩道では植生が衰退し裸地化して浸食が進み滑りやすくなっています。

未整備の遊歩道の浸食を防止するため、多くのボランティアの皆さんと共に遊歩道に芝を張り浸食を防止する活動を行っています。

【草原の再生活動】

元「秋吉台青少年宿泊訓練所」周辺は草刈りが良くされており野草の宝庫だった場所ですが、廃止になり長年放棄されたため、野草の種類も激減しました。そこで、野草の宝庫だった場所の一部を草刈りをする事により、元の草原に戻し野草を復活するための活動を始めました。

この活動も今年で14年目となり、現在では絶滅危惧種13種を含む多くの野草の宝庫に戻りつつあります。また、年に数回の「自然観察会」や「小学生の草原学習」などを通して、草原保全の啓発活動や体験学習も行っています。



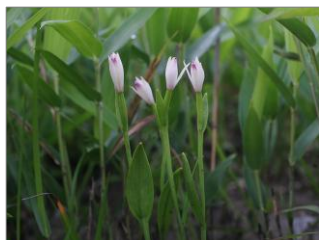
例年の山焼きの様子



遊歩道の整備



草刈り作業



ヤマトキンソウ

〔山口県カテゴリー〕 絶滅危惧IA類(CR)



コキンバイザサ

〔山口県カテゴリー〕 絶滅危惧IB類(EN)



体験学習で小学生も草刈りに挑戦！

※写真はすべて松井さんからご提供いただきました

ボランティア募集 のお知らせ

秋吉台の自然に親しむ会では、現在ボランティアを募集しています。
秋吉台の自然を守ることにご興味のある方は、ぜひご参加ください！

内容 遊歩道の補修 シバ張り
日時 2026年3月7日（土）9:00～午前中終了予定
※雨天の場合は3月14日（土）に延期
集合場所 長者ヶ森駐車場
準備物 汚れてもよい服装、靴、かなづち（あれば）
申込先 秋吉台の自然に親しむ会 事務局 松井茂生
申込方法 E-mail : akiyoshidai@mx5.tiki.ne.jp
保険加入のため、氏名、年齢、住所、電話番号
をお知らせください。
詳しくは当会ホームページの募集チラシをご覧ください！
<https://akiyoshidai.studio.site/>
申込期限 2026年2月10日（火）



※お知らせいただきました個人情報、当事業の運営管理の目的にのみ利用させていただきます

自然保護課からのお知らせ

自然共生サイト中国地方ミーティング2025を開催しました！！

〈自然共生サイト中国地方ミーティング2025とは〉

自然がもたらす恵みを持続可能な形で享受できる「自然共生社会」。その実現へ向けた新しい国際目標「30by30」や身近な自然資本を活用した地域づくりに寄与する「自然共生サイト」と里海づくりの取組を知っていただき、その輪を広げていくための情報交換会です。

開催日 2025年11月25日（火）

開催場所 山口グランドホテル

主催 山口県、環境省中国四国地方環境事務所、EPO中国

〈主なセッション内容〉

- ・中国地方の自然共生サイト認定団体等の取組紹介
※桜郷銅山跡農村公園自然共生サイト[山口市阿東]など
(令和6年度後期・令和7年度第1期の認定団体)
- ・里海づくり等に関する団体の取組事例
※防府市藻場造成による豊かな里海づくり協議会など
(令和6・7年度令和の里海づくり基盤構築支援事業および
令和7年度良好な環境を活用した観光モデル事業の採択団体)
- ・自然共生サイトの登録・活用に向けたワークショップ



※今回のミーティングを通じて自然共生サイト・里海づくりの担い手が繋がりを持つことができました。今後情報共有などを通じて更なる連携体制の構築を図ります。